

公開講演会

漫画でつなぐ、中世北欧と現代日本

幸村 誠

司会・構成 小澤 実 写真 中丸禎子

本講演「漫画でつなぐ、中世北欧と現代日本」は、立教大学文学部史学科一年生の必修科目「入門演習」の一環として、二〇一七年五月二五日五時限に、八号館八一〇一教室で開催された。講演者の幸村誠氏は一九七六年東京生まれの漫画家。代表作に『プラネテス』（講談社、一九九一―二〇〇四年、全四巻）ならびに『ヴィンランド・サガ』（講談社、二〇〇五年から連載中、二〇一八年三月現在二〇巻）

掲載誌は、最初『週刊少年マガジン』、現在は『月刊アフタヌーン』がある。著作に「アイスランドを越えて、世界の果ての、その果てへ 本当の冒険者トルフィン・トルズソン」（小澤実・中丸禎子・高橋美野梨編『アイスランド・グリーンランド・北極を知るための六五章』明石書店、二〇一六年）がある。

当日の司会は史学科世界史学専修の小澤実がつとめた。本講演の本誌への掲載は、科研費国際共同研究加速基金（国際共同研究）（課題番号 15KK0062、研究代表者小澤実）の成果の一部である。

講演

司会…これより二〇一七年度史学科入門演習の学内講演会を行います。史学科一年生向けの入門演習では毎年第一クール（六回）が終了した後に、ゲストをお呼びして歴史学に関連するお話を頂戴しております。今年のゲストは漫画家の幸村誠さんです【写真1と2】。

幸村さんの本日の講演タイトルは「漫画でつなぐ、中世



写真1



写真2

北欧と現代日本」です。最初に幸村さんと作品をご紹介いたします。幸村さんは一九七六年生まれです。大変若く見えますが、司会の私とさほど変わらず四〇歳をまわりました。彼は、スペースデブリと呼ばれる宇宙のごみを集める仕事をテーマにした最初の長期連載漫画『プラネテス』で、二〇〇二年度に星雲賞を受賞されました。二〇〇五年からは、紀元千年前後のヴァイキングをテーマにした『ヴァインランド・サガ』を、最初は『週刊少年マガジン』で、その後『月刊アフタヌーン』で連載されています。その『ヴァインランド・サガ』は、二〇〇九年に第一三回文化庁メディア芸術祭漫画部門の大賞を、二〇一二年には第三五

回講談社漫画賞一般部門を受賞し、既に数百万部の売り上げを誇る、大変人気のある漫画です。

『ヴァインランド・サガ』は、非常にリアリティのある時代背景のなか、主人公のトルフィン・トルザルソンの成長を描き出す作品です。「リアリティのある時代背景」とは、北欧出身の海の民であるヴァイキングの世界です。彼らはアメリカ大陸から黒海に至るまで、非常に広い範囲を舞台に活動していました。主人公のトルフィンは北大西洋に浮かぶアイスランドを出自としています。

アイスランドは二〇一七年現在人口三四万人の大変小さな国です。名前のとおり「アイス」＝「氷」の島で、氷河で覆われています。他方で火山の国でもあります。マグマを溜め込んだ大西洋中央海嶺の上に来た島で、「ブルーラグーン」などの温泉もあり、現在も度々噴火が起こっています。トルフィンが生まれ育ったアイスランドは氷と炎の島でした。

漫画のタイトルにある「ヴァインランド」は、現在のアメリカ大陸にあったのではないかと言われている土地です。歴史史料上では確定できないことが多いのですが、カナダのニューファンドランド島にランス・オ・メドウ (L'Anse aux Meadows) と呼ばれるヴァイキングの入植地も見つかっており、ヴァイキングが北アメリカに到達していたこ

とは確かです。最近も、同じニューファンドランド島にあるポワン・ロセ (Point Rosee) でもう一件、ヴァイキングの入植地と思われる発見がありました。私たちはアメリカというところ、一四九二年のコロンブスの到達をしばしば思い起こしますが、今は高校世界史の教科書でもヴァイキングが一世紀にすでにアメリカ大陸に到達していたと書かれています。

皆さんに資料としてお配りした文章は、幸村さんの「アイスランドを越えて、世界の果ての、その果てへ」というタイトルのコラムです。私とこちらにいらっしやっているスウェーデン文学研究の中丸禎子先生、そして北海道大学におつとめでグリーンランド政治の専門家である高橋美野梨先生の三人で編んだ『アイスランド・グリーンランド・北極を知るための六五章』に寄稿していただきました。幸村さんがなにを描こうとしているのかを証言した、『ヴァインランド・サガ』の成立を知る上で大変貴重な資料でもあります。またつい先日になりますが、熊野聰先生の『北の農民ヴァイキング』(平凡社) という一九八三年の著作が一部改版され、わたしの解説と文献案内をつけて『ヴァイキングの歴史』(創元社) というタイトルで復刊されました。これは日本人が生み出したヴァイキング研究の成果として記憶されるべき名著ですが、幸村さんも『ヴァインランド・

漫画でつなぐ、中世北欧と現代日本（幸村）

サガ』をご準備される段階で熊野先生からお話を伺ったそうです。この新版のオビには幸村さんからトルフィンのイラストと文章を頂戴しました。

というふうに、幸村さんには研究者の側からも、ヴァイキングに関わるいろいろなお仕事をお願いしているのですが、今回は史学科の新入生に向けた講演会ということで、四年間歴史学を学んでいく皆さんのために、漫画を通じて歴史世界がどういうふうに描かれているのかをお話していただくと考えております。

学生の皆さんも含めた私たち研究者は、通常、過去の人間が記録した史料や、研究者のあらわした研究書や研究雑誌を通じて過去の世界にアプローチします。しかし歴史へのアプローチは必ずしもアカデミックなものだけではなくありません。同僚の松原宏之が最近のエッセイ「人は「歴史する」、ゲームでもアニメでも」（『史苑』七七一、二〇一七）で主張するように、インターネットでもゲームでも、テレビでも小説でも、そしてアニメでも漫画の中でも歴史世界は存在しているわけです。私たちはさまざまなメディアの中にある歴史と日々接しているわけですが、メディアを通じてどれほど歴史世界に迫ることができるのか、そして現代の日本を生きる私たちにとって歴史は——今日幸村さんにお話しただくのは一〇〇〇年前の北欧という、私たちとは

全く関係がなさそうに見える世界なのですが——一体どういうふうな意味を持ち得るのでしょうか。こういうことを考えながら、幸村さんにお話を頂戴できればと思っております。それでは幸村さん、お願いします。

幸村：ご紹介にあずかりました漫画家の幸村誠と申します。大学には随分昔——一〇数年前だったでしょうか——に一度学園祭に呼ばれてきたことがあるだけです。大学キャンパス自体が久しぶりです。そのときは学生の皆さんを友だちのようなごく近い存在のように思っており、今回もそのようなつもりでキャンパスに入ってまいりました。しかしよく考えますと、皆さんは僕の子どもであってもおかしくない世代であるということにハタと気付きました。年月というものは残酷で、あつという間に過ぎるのだと大学構内に入ると感じたのです（笑）。少年老いやすぐ学成り難しと言いますね。みなさんもさんざん言われているかもしれませんが【写真3と4】。

今、司会の小澤先生から経歴のご紹介をいただきました。一〇〇〇年前の北欧ヴァイキングを描いた漫画の連載を一二年くらい続けています。海外の方には非常によく「日本人のあなたがなぜヴァイキングを書いているのですか？」と聞かれます。僕のような人であったとしたらやは



写真3

り僕でもそう思うでしょう。もしノルウエーの作家さんが日本の侍の話を書いていたら「なぜ？」とやはり聞いてしまいます。その問いにお答えするとすれば、「面白そうだったから」です。シンプルにそのような感じなのです。第一に、ヴァイキングの活動には漫画のテーマになりうる要素が非常にたくさんあります。何といっても、彼らは冒険好きで派手に戦い合っていて、英雄的な最期を遂げる戦士です。いつの時代も海賊や海洋冒険といったものは、特に男の子の気持を捉えて離さないものだと思うのです。

連載は、「そういう要素をたくさんもっているヴァイキ

史苑（第七八巻第二号）



写真4

ングなのだから売れるだろう」「このテーマは他に誰も手を出していないから、今俺が出したら独壇場だ」という、そのぐらいの気持ちで始めたつもりだったので（笑）。しかし取材を重ねていくうちに、「それだけではないな」と思うようになりました。ヴァイキングという題材は、いろいろなテーマを盛り込む余地や、現代の日本に生きる僕

たちにとっても課題となりえる様々な問題をはらんでいると感じます。

とはいえ、最初はただ「面白そう」と思ったヴァイキングももう一二年も描いていますから、いかげん少々嫌になってきています（笑）。しかしこれが終わらないのです。最初は一〇年で終わらせますと編集さんに言ったのですけれども、おかしいですね、すでに二年オーバーしています（笑）。わたし自身の計画性のなさが出てしまったわけですが、まだしばらく続けるつもりでいます。

さて、なぜ現代日本の東京に住んでいる僕がヴァイキングを題材に漫画を描いているかという点を、もう少しお話いたします。「この題材は売れそうだ」という下心から取材を続けていくうちに、当初思いもよらなかった発見がありました。ひとつにはヴァイキングの世界が暴力的である点です。僕の中で「暴力について少し描いてみる必要がある」と考えた時期があります。僕はもちろん暴力は嫌いなのです。僕自身弱いので、殴るのも殴られるのも痛いのも大嫌いです。でも、だからといって暴力を全く目に入れないままでいても物事の正体は見えてこないのです。「暴力について一生懸命描いてみようか」と思ったのです。ここが立脚点です。そして、その問題を描くための舞台を探して

いるときに、ヴァイキングたちの世界観に出会ったわけですよ。

「暴力を考えるためであれば、ファンタジーでもいいのではないか」という質問を受けたこともあります。捉え方は人それぞれなのですが、ファンタジーは、この世界の過去でも未来でもなく、現在でもない、どこかパラルレルな世界での出来事です。そうしますと、その世界で起こっていることをわれわれのことと思って受け止めることが少し難しいのではないのでしょうか。魔法が出てきたりしてしまうと、読者は「ウソの話だ」と理解して、一生懸命何か言おうと思っても聞いてもらえないかもしれない。それで、「暴力的で、それでいて過去のどこかの時代がないものかな」と探しているうちに、あるヴァイキングに行き当たったのです。主人公のモデルにさせてもらったトルフィン・トルザルソン。実在したとされるアイスランド出身の人物です。トルフィン・トルザルソンは面白い人で、アイスランドの商人とされています。先程小澤先生もおっしゃっていましたが、どうやらコロンブスに五〇〇年ほど先駆けてヴィンランドと当時呼ばれていた北アメリカ大陸に本格的な入植を試みた人ではないかと言われています。すごいことです。一〇〇〇年も前に大西洋を船で渡ったのですけれども、船というものも現代われわれが想像する船とは少し違いま

す。どう言ったらいいのでしょうか、大きなボートです。当時の「船」は、平たくて長い、手でこいだりする「ボート」を、ただ大きくしたようなかたちだったのです。雨が降ったら濡れるまま、風が吹いたら「寒い寒い」という、そのままです。どうしてこの船で大西洋を渡れたのかと、僕是不思議に思うのですけれども、彼らにはバイタリティがあったのです。しかもとても寒い地方です。彼らも「行ったら戻らないぞ」というぐらいの覚悟で、暮らしに必要な道具なり家畜なり、そして女性であれ男性であれたくさん仲間を船に乗せました。「移り住んだら、そこに国を作るんだ」ぐらいのつもりだったのだと思います。彼らはしっかりと準備して、何隻もの船でアメリカ大陸へ渡りました。

最初ただ僕は、お金持ちになりたくて漫画のネタを探していただけなのですけれども（笑）、このエピソードを歴史の本から知ったときに、「なぜだろう」「彼らヴァイキングはなぜそこまでするのか」という疑問が湧いてきました。そうしたら他のアイデアは目に入らなくなりました。彼らはとても不思議です。他に幾らでも生きていく道はあるだろうにと思います。アイスランドもその当時はもう開拓されるだけ開拓されてたさんの人が住んでいて、窮屈といえは窮屈ですが、暮らせないわけではありません。そこに

はずでにコミュニティがあるのです。「そこで暮らしていればいいではないか」と思いませんか。

もしも、今以上のお金持ちになりたい、もっと名を挙げて戦士として成功したいという野心を持つているのなら、ヨーロッパに向かうはずだと思のです。アイスランドの位置は分かりますよね。大西洋の一番北側、北極圏に片足を突っ込んでいるようなところです。西に行けば北アメリカで、東に行けばヨーロッパという地域です。距離から言えばさほど遠くないでしょう。ではなぜヨーロッパに行かなかったのでしょうか。なぜ何も情報のない、何も分からぬ北アメリカ大陸へ彼らは命を懸けて向かったのでしょうか。僕にはそれが非常に大きな疑問でした。

その疑問に明確な回答を与えてくれる史料は、今のところどうやら発見されていません。トルフィンの気持ちを代弁する文章は発見されていないようですけれども、僕はフィクション作家です。自分で「こうだったのではないかな」と思う彼の内心を描いてしまってもいい職業なのです。そこが、学者の小澤先生がご苦労なさっているところと全然違う点で、僕はウソを描いてもいい人なのです。トルフィン・トルザルソンというアメリカ大陸に渡ったすごい人にして、作品中では、今の研究で推定されている年齢よりも二〇年は若く描いています。そういう意味ではウソば

かりなのですけれども、「面白いからいいや」と思っちゃってしまうのです。もし僕の漫画をお読みの方がいらっしゃいましたら、資料として引用することだけはおやめください（笑）。ストーリーとして面白ければいいやと思ってしまうので、そのあたりはボンコツです。

それで「トルフィン」は北アメリカ大陸になぜ移り住んだのだろうか」と、僕はフィクション作家としてあれこれ考えるわけです。そういうふうにものを考えるとき、完全に一〇〇〇年前のアイスランド人の気持ちになって考えることは不可能です。現代の日本に暮らす一人の男としての主観から離れることはできません。だから開き直って、「もうどうせそこから離れることができないのなら、現代日本人的な感覚からトルフィンのことを理解したつもりになってみよう」と一生懸命考えました。

今僕は漫画などを描いてのうのと日本で暮らしていますが、日本はすごい国です。まず戦争がありません。僕はおよそ四〇数年東京などで暮らしていますけれども、道端で暴力が行使されている場面を見ることがありません。ケンカすらありません。もちろんケンカは起こっているのでしょうし、僕がそういうところにたまたま行かないだけなのかもしれませんが、日本で暴力が行使される場面に出会

う頻度は非常に低いように思います。

ましてよくこう思うのです。東京だけでも一〇〇〇万を超える人がいます。これだけ人がいるのであれば、一日外を歩いていたら道端に二、三人の死体が転がっていいと思いませんか。しかし全員生きています。「ばかな」と思うのです。スクランブル交差点を人が歩いて赤信号になってさーっと引いたときに、交差点の真ん中に二人ぐらい倒れていてもおかしくないいつも思うのですが、そのようなことはないのです。日本は非常に秩序正しい国ですし、死や暴力から遠ざかって暮らすことが可能です。これはすごいことだと思うのです。とはいえ、コンサートの最中に自爆テロをドンとやらかす人もいるご時世なので、この先は分かりませんが。

そのような現代日本の、暴力的な面ではぬるま湯の中で育った僕が、もし一〇〇〇年前の北欧に暮らしていたらと思うととても耐えられません。僕がアイスランド人——ノルウェー人でもデンマーク人でもいいのですけれど——のヴァイキングの家系に生まれたとしましょう。僕は男です。からある程度の年になったら、まるで成人式のように、「お前もそろそろいい年だから船に乗って人を殺しに行きなさい」「その人の家に押し入って暮らしている人を皆殺しにして金品を奪って帰りなさい」「それでこそ一人前の男

だ」と言われます。僕は「結構です」とお父さんに言って山にこもると思います。お父さんはそのような僕を厳しく叱責するでしょう。「何と腰抜けなのか」「それでも俺の子か」と言うでしょう。そのようなことになったらたまりませんが、でも一〇〇〇年前の北欧と現在の日本との間の、文化的、民族的、時代的な差というのはそのぐらいあると思います。でも、ヴァイキングが剣や斧を振り回していた一〇〇〇年前の北欧にも、暴力が大嫌いな人、乱暴なことをしたくない、平和に穏やかに生きていきたいと思っている人はいたと僕は思うのです。社会を作っていたのは男だけではありません。当然女性や子どもやお年寄りもいたはずです。そうした人たちは、体格がよくて武装をした男の大人連中に随分迷惑をこうむっていたのではないかと推測されます。そういう人たちもいますし、そうした男たちのなかでさえ、こんな文化は嫌だなど思っている人はいたと思うのです。

とりわけ一〇〇〇年前の北欧の何が嫌かという点、天国に関する感覚です。これは全員ではなくて戦士の天国の感覚です。みなさん、天国をどんなふうに想像しますか。死んだ先にこんな世界があったらいいなという空想をいいてイメージする天国は、お花畑があつて安穩に暮らしてい

ける、暖かいのだから寒いのだかという微妙な気温の世界のような気がしませんか。よいことをしたら行けるのが天国だと。でも北欧戦士の天国は、めちやくちやに戦つて勇ましく戦死したら行けるところなのです。

「そうやって行つた天国なら、よほど安穩と暮らしているのではないか」と思うのですが、「やった、天国に来た」といって、そこで彼らの魂がやることは戦闘訓練なのです。明けても暮れても天国で——「ヴァルハラ」というのですが——戦いの毎日を送るのです。お互いに集まつてきた優秀な戦士たちの霊がお互いに斬り合つて、体もばらばらになってしまうのですけれども、一日たつと傷はまた元通りに戻つて、なくならないお肉を食べ、なくならないお酒を飲んで宴会をして、ぐっすり眠ると、また明日殺し合う。夕方にはまた体は元に戻ります。これが彼らの天国なのです。

「ばかな」と思うのです。生きている間さんざん殺し合つて、「もつと殺し合えたらいいな」と思つて死ぬのです。「すごいな」と思うのです。少し見栄っ張りなのではないでしょうか。俺はこのように勇ましいのだというアピールもあるかもしれませんが、「本当に戦いを求める人々がいたのかな」とも半分は想像します。

「カルルセヴニ」はトルフィンについたあだ名です。俠

気があるという意味らしいです。そういう世界で僕がトルフィン・トルザルソンに託したものは、「かわいそうに現代の日本人が北欧の世界に生まれてきてしまったら、どうなるのだろうか」というところなのです。彼自身は乱暴をいとう性格です。つらいですよ。今こうして生きていて、皆さんがそういう感覚をお持ちでいらっしやるかどうかわかりませんが、僕は学生時代に「どうも世の中とそりが合わない」「なぜこれほど生きづらいのだろうか」「僕は何か悪いことをしたのだろうか」、そうよく思ったものです。今ここでこのように皆さんにお話をしておりますけれども、「僕の学校での成績を聞いたら、半分くらいは立ち上がってそちらから出て行かれるのではないか」と思うくらいの学生でした。

このような世の中であまりに僕は無能で、皆とそりが合わなくて「将来やっていたいけるのか」と、ずっとそのようなことを思っていました。でももし一〇〇〇年前の北欧に生まれていたら現代日本の比ではないと思います。生きづらいなどというのではなく、死ぬしかないぐらいの違和感の中で、激しいストレスの中で生きていたと思います。僕はトルフィン・トルザルソンが、アイスランドを離れて、東方のヨーロッパではなく、西方の誰も知らない未知の大陸である北アメリカへ移った大きな動機が、そこにあると

いいと思っています。

若者ですから、内からの衝動で「何か行動したい」「自分はここにいるのだという証明を自分自身にしてみたい」という気持ちはあると思います。でもその当時は男の子の情熱がどこへ向くかといえば戦争です。略奪遠征というものです。遠くへ出かけて行って人を殺して、品物を奪ってくるのです。これしかありません。それを嫌ったらどこへ行けばいいのでしょうか。だからこそ北アメリカ大陸なのです。ヨーロッパへ行ってしまえば戦う羽目になります。しかし北アメリカ大陸は、彼の冒険心や情熱をぶつけてもいい無垢の大陸です。そこに国を作るのです。トルフィンには本当に戦いが嫌いだからその選択を取ったと僕は思っています。連載前に資料を調べて、トルフィンという男に対する僕の中の妄想がだんだん膨らんでいくに従って、僕はトルフィンを好きになってきました。彼を主人公に描くしかないという思いで漫画にまでしてみたのです。

先日とある漫画家さんが——その方はもう亡くなられたのですけれども——「人類は平和というくびきから自由にならねばならない」という言葉を残したらしいと小耳にはさみました。僕はこの言葉の意味が十分に分かっています。しかしなぜ「人類は平和というくびきから自由にな

らなければならぬ」のでしようか。平和を求めて、「北
欧世界の暴力の渦から何とか逃れたい」と思っているトル
フィンを主人公とした漫画を描いているときに、SNSを
通じて、ある種のお叱りを受けることがあります。「そう
はいっても幸村さん、戦争が歴史と人類に及ぼす重要な役
割について何もご意見はないのですか」と怒り交じりに言
われることもあります。「戦争があるから人間は増えすぎ
ないで済むのだ」「戦争があるから産業が発展した、戦争
があるから新技術がぐんと伸びる」などです。なかでもよ
くそのようなことが言えるなと思つたのは、「戦争によつ
て間引きがあるから、われわれは健康に自分たちで数を調
整して文化文明を保つていられるのだ」という見方です。
僕にSNSを通じてそのようにご意見をくださる方がい
らっしゃいました。

しかしその戦争で間引かれる人の中に自分自身や家族が
いたとしたらどうでしょう。僕は嫌です。僕が戦争を嫌
うのは本当にそれだけの理由です。それと同じように他の
人たちは死んだら、そのお父さんやお母さんや兄弟、友達
といった悲しむ人があるでしょう。六〇億からなる人類は、
そうやすやすと人数調整と言つていい存在の集まりではあ
りません。「一〇億増えたから、こちで一〇億減らそう」
などと言う人もいます。氷のような客観性を僕が持てるの

であれば、「そのような物言いにも一理あるのかな」と一
瞬同意するかもしれません。歴史をそういう観点から見
方は結構いるのだなど、本を読んでいても思えます。

われわれ人類は生物の中で最も強い存在になり、頂点に
立ちました。「われわれを捕食する食物連鎖の上がない
から、自分たち同士で殺し合わなくては寿命が延びる一方」
と見る人がいます。しかし何とかしようとして答えをあつ
さり出そうとするのは間違いだらうと思います。本当の答
えは僕には分かりませんが、戦争によつて解決が得られる
などという考えにやすやすと持つていくのは安易であると
言わざるを得ません。困るでしょうが困ればよいのです。
その都度その都度頭を抱えて悩めばよいのです。主人公ト
ルフィンにはそれを課しています。

トルフィンは誰も傷つけずに平和に生きるのだと誓つた
日から、ずっと悩みつぱなしです。たびたび仲間の命か敵
の命かという二者択一を迫られます。仲間と敵であれば皆
さん当然「仲間を選ぶ」と考えるのでしょうかけれども、主
人公トルフィンはそこで悩みます。戦争だからといってそ
の相手は殺していいわけではないのです。法に照らせば正
当防衛が成立するかもしれませんが、やはり殺していいわ
けではないのです。

僕が思うに、一番よいのは「出来る限り逃げること」な

のですけれども、どうしても逃げ切れなかったときは戦うしかないのかもしれない。そうなった場合、逃げが足りないという人もいるでしょうし、すぐ戦うぞという方向に考えが進みがちな人もいます。精一杯悩んで悩んで、一〇〇〇年前の北欧のような暴力的文化の中で、「それでも平和に生きていきたい」「他人の命を尊重して大切に生きていきたい」と願ったとき、どのような決断をするのでしょうか。それを今ずっと悩みながら漫画に描いています。

このような問題に対してはつきりとした答えが出たと思うことは一生ないでしょう。漫画に描いていてもそうです。僕の漫画は結論を出しません。「こういう事件があった」とただ描くだけです。幸村は「こうしたらいいのではないか」は、まるで描く気がありません。困ったと思っておりますが、「皆も困ってしまえばいいのだ」「一緒に困りましょう」ということを、一〇〇〇年前の北欧を通して、現代の日本に暮らす皆さんと分かち合えたらいいなと思っております。

こう話してみますと、なぜこれで僕はご飯が食べられていいのか、分からなくなってくるところがあります。随分とわがままな自分の思いをただ紙に描きつづるとお金がも

らえてしまう夢のような職業漫画家です。でも皆さんに漫画家になることは勧めません。あまり楽ではないです(笑)。もし皆さんこれから歴史などの授業でヴァイキングに興味をお持ちになるようでしたら、「このような世界にわたしが、僕が暮らしていたらどうだっただろう」という想像を巡らした上で、「どう生きるだろう」と考えてみられるのも楽しいのではないかと思います。一介の漫画家の長口上をどうもありがとうございました。

質疑応答

司会…幸村さん、ありがとうございます。普段多くの人の前で話される機会がないので、緊張されたかもしれませんけれども、とてもよいお話を頂戴したと思います。私は歴史学者として、幸村さんは漫画家として一〇〇〇年前の北欧にアプローチしているわけです。実は数年前に二人で荻上チキの『Session 22』というラジオ番組に出演したことがあります(二〇一四年一〇月一七日のレクチャーモーター「ヴァイキングの栄枯盛衰」)。そのときに私はリスナーの質問に対して歴史家として言えることをお答えしました。ただ、歴史学は証拠がないと言えません。これは皆さんが恐らく今後卒業論文を書いていく段階で誰もがぶち当

たる壁です。歴史学者は言いたいことが全て言えるわけはありません。直接的であれ間接的であれ証拠は断片的にしか残っておらず、われわれはそこから言えることしか言えないという制約があります。どれほど「多分こうだろう」と思っても、それを証拠立てるものがないと論証できないのです。ですが、ラジオでも幸村さんはおっしゃっていたと思います、今のお話にもありましたように、漫画という世界に仮託した場合は、証拠を超えてその先の世界を想像できるというメリットがあると思うのです。

幸村…少々いいかげんでも許されるということです。

司会…というふうに幸村さんはおっしゃいますが、ただ皆さんにもぜひ『ヴィンランド・サガ』を読んでいただきたいのです。これは「いいかげん」に描かれたものではありません。われわれ専門家が『ヴィンランド・サガ』に接して驚くのは、幸村さんが創作される前の段階で詳しく背景について調べていらつしやることです。幸村さんは、その都度手に入る限りのデータを使って舞台を設定しています。そうしたデータに基づく一〇〇〇年前の北欧で生きている、動いている、考えている人間たちは幸村さんの中で生まれてきた人間たちです。文字通りの創作ですが、ひょっとするとそのような人もいたのだらうなと思わせるぐらいのリアリティを持った人間たちなのです。私のような歴史

家が、史料に書かれた文言から一步踏み出すことができないのに対して、これは漫画という表現手段を持つ人の特権なのだろうと思うのです。ですので、幸村さんもわたしも同じ世界を見ているわけですが、その一点においてはかなり大きな違いがあります。どちらがいいということではないのですが、これが漫画の持つよさというか、人をひき付ける魅力の一つなのだろうと思うのです。などと私があればこれ言っても仕方がありませんので、質疑応答に入りたいと思います。

幸村…何でも答えます。

質問者A…漫画の内容に関して、書籍だけではなくてヴァイキングの専門家にも聞いていると思うのですが、そういう場合海外の研究者にも会いに行くのでしょうか。

幸村…海外の研究者が会いに来てくださったことがありますが、お世話になった研究者は国内に限られます。北欧各国に取材には行きました。それは絵を描く上では必須です。舞台となる北欧がどのような風景なのかは見てこないといけないです。

質問者B…漫画は歴史の本と違って、実際に目に見える絵として落とし込むと思うのですが、あたる資料は、基本的には絵ではなく文献です。それを漫画の絵に描く上での苦労はどういうものがありますか。

幸村：例えば人物の姿かたちですね。北欧の人物はあだ名がついていて、「のっぼのトルケル」や「八の字髭スヴェン」といったように、ある程度は外見的特徴があだ名に反映されています。そこからイメージを湧かせることができますが、そうはいっても限度があります。写真もありません。例えばこちらに映したイングランドのエドモンド王の資料から、漫画の登場人物としての顔を描き起こすのは不可能です。これもそうです。デンマーク出身のクヌート大王は北欧史で最も有名と言っているヴァイキングです。隣にいるのが奥様のエマです【図版1】。これも無理です。今はキャラクターの外見の話をしましたけれども、かなりの部分を想像で補う必要があります。ですから文章を読んで想像し



図版 1

て勝手に描いてしまうのです。髪の毛が逆立った登場人物がいますが、描きながら自分で思っているのです。ジェルもムースもないのにどうして逆立ったままでこの人はいられるのでしょうか。文字史料から、かなり頑張って想像でビジュアル化することが多いです。

質問者B：想像で作品を描かれているとのことですが、それでも史学科の先生方がそれを見て史実に基づいたものと納得できるとすれば、それは幸村先生の裁量というか感覚がなかなか理にかなったものだという事なのでしょう。か。

幸村：ありがとうございます。先ほど小澤先生にもそのようにお褒めいただいたのですけれども、「ありがとうございます」と言いながら、「そんなばかな」と思っています（笑）。適当に描いたのです。ですから今手に入る史料を一生懸命読み込むと、大体どの人でもぼんやりしたイメージを共有できるところまではいくのでしょうか。それも描き手によって違うかもしれませんが。

質問者C：いつか先生は、完全な偉人の伝記を描くつもりはあるのですか。

幸村：先のことですので、あやふやではありませんけれども、興味のある偉人が一人います。東インド会社がまだインドを支配している頃の話ですから一八〇〇年代ですが、ラク

シユミー・バーイーという女性です。ラジャの王妃様で、インドのジャンヌ・ダルクと呼ばれています。東インド会社の抑圧に抵抗し、インドを解放しようとして、女性の身でありながら馬にまたがり剣と盾を持って戦いました。混戦の中に突進していつてそのまま行方不明という壮絶な最後を迎えます。かっこいいと思いました。暴力は嫌いとし上げていますが、その中でもあらがいたい強大な力、大英帝国の前にどうしても逃げられないときには立ち上がる女性もいたというのが感動させられます。いつか描けたらいいなと思います。

質問者D…文献など漫画に関わる歴史を調べていく中で、自分が考えている面白い話と事実がかみ合わないときは、事実のほうを優先するのか、自分の中のフィクションを優先するのか、どちらにバランスを置くのでしょうか。

幸村…それはほぼ面白いほうを優先します。歴史上はこうだけでも、あまり面白くないかなと思つたら、「本当は」とか、「表面はそのような歴史が残るけれども実は」といったことを勝手に描いたりします。漫画家ですので、面白かつたらいいやという判断が何より勝ります。

質問者D…取材はどれくらい時間をかけましたか。

幸村…海外取材はトータル二週間ほどあちこち回った覚えがあります。『ヴィンランド・サガ』の場合は、資料を集

めたりそれを読んだりする時間が結構取れまして、確か、約一年はああでもないこうでもないとしていられたと思います。

質問者E…この漫画は一〇〇〇年前という非常に古い時代を扱っています。漫画は世界観も大切だと思うのですが、実際に絵にしたときに建物や食べ物などがそれほど華やかではなかったとしても、読んでいる人に「行ってみたい」とまではいわなくても——「この世界はすてきだ」と思わせることは大切だと思います。実際に見てみたら地味なものを、話として華やかにするために工夫していることはありますか。

幸村…『ヴィンランド・サガ』は講談社から出ているので、その編集者さんとやり取りをするのですが、連載開始前に一番口酸っぱく言われた注文が「女性の戦士を出せ」でした。その当時はやったのです。「身の丈を越すような剣をもて」「キヤラクターグッツになりやすい肩に乗る小さな生き物を描け」、あとかっこいい鎧でしょうか。しかし現実には鉄でできたセーターのような鎖帷子なのです。地味なのです。「もつと尖ってピカピカした兜と鎧を描け」「嫌だ」のやり取りをよくしていました。これはいまだに困ったなと思つているところです。

戦闘シーンの絵面として困るのが、(ヴァイキング時代

の北欧には火薬がないため）爆発が描けないことです。火薬でドカーンというのは本当に派手ですから、全然画面の栄えが違いますが、駄目です。そうなるとうどうにかこうにかウンも交えねばなりません。歴史とうどうにか漫画の技法の話になりますけれども、せっかく黒板があるから描きます。（棒と丸で人体を書きながら、おどけて）これは漫画家の描く人体です【写真5】。「エイ！」と剣を突き立てて、「ギャーツ」と。何とうまいのでしょうか。生きているように派手さが足りないと思うとき、どうするかというとうどうです。パースがばらばらですけれども、これでも本当に漫画家なのです。今休暇中なので気の抜けたところがありますけれども、本当ですよ。しかもここを中心にスピード線をいれると少しは派手になります【写真6】。構図の選び方です。同じシーンでもカメラをどこに据えるかで、迫力のある絵になったりならなかったりします。こういうことで何とかかんとかでっち上げてやっています。早めに消しましょう。これは僕の本の売れ行きに関わります（笑）。

質問者F…先ほどあるところまではフアクトだが、勉強して、その先どの程度、脚色・潤色するのかわかという質問ができましたが、逆のことはあるのでしょうか。つまり大体こういう話かなと思って資料を見たり歴史家の説明を聞いたり

してみると、当初自分が想定していたよりも設定が広がったり、変わったたりといったことはあるのでしょうか。

幸村…それはよくあります。最初に出だしからエンディングまである程度こうかなと想定します。しかしすぐくずれていきます。困ってしまいます。

資料や専門家の話とは少し違いますが、一番想定外だったのが「親子の話」になっていることです。最初資料を調べているときは考えてもいなかったのですが、今は「父子の話」が大きな副題になってきています。『ヴィンランド・サガ』はそういう漫画なのです。お父さんが立派であったり駄目な人であったり、逆に子どもがそうであったりなど、いろいろなお父さんと子ども関わりの話がでてきます。

父子の話ばかりになるのは多分、歴史の本で、お父さんのことは描かれるけれども、お母さんのことはほとんど描かれなからではないでしょうか。女性は誰々母や誰々妻と書かれます。昔僕は清少納言というのは少納言が位だとしたら清が名前だと思っていました。キヨシと書いていました。どうも違うようです。彼女は少納言でもありません。少納言はお父さんの位なのです。清少納言と呼ばれる彼女に付けられた名前が何かというのをついに知らないままです。あれだけ有名な人でさえ、女性は本当の名前が残らないぐらい歴史上ないがしろにされています。

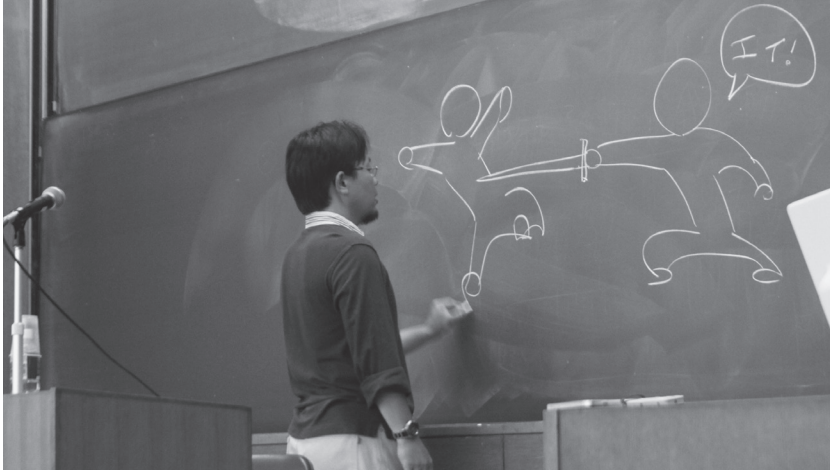


写真5

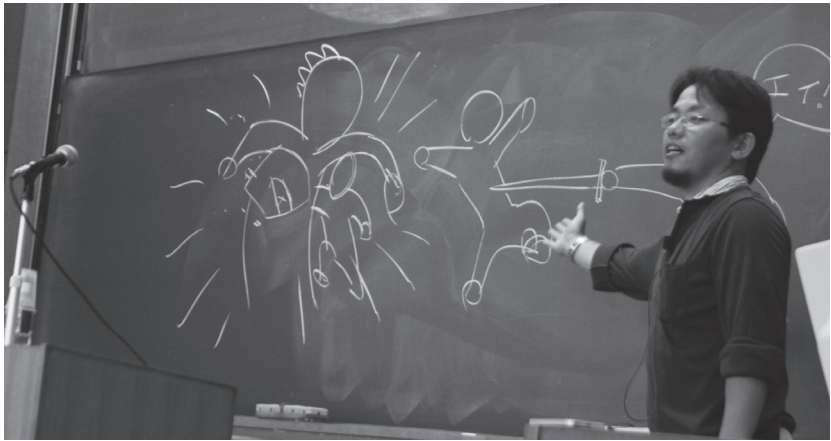


写真6

ですから史料をそのまま読んでみると、お父さんと男の子の登場人物ばかりになってしまうのです。困ったなと思いました。元々女心の分からない人間なので、あまり女性人物が多くないほうがありがたいことではありますが。お尋ねの主旨とは違うかもしれませんが、歴史の本はそういうバイアスを僕にかけてたなと思ったりもしています。結果的にはそれでよかったです。

中世北欧の女性というのは、それでも、当時の他のヨーロッパ地域の女性に比べたらさまざまに権利が保障されており、相対的に立場が強かったと研究書で拝読しています。女性名義の財産がしっかりとあり、それは夫と共有

していません。離婚の自由があり、離婚したら財産を持って家を出ることもできました。すごいと思います。この辺は消化できない部分でもありますが、これほど男の人が乱暴で剣に名誉を託していた時代にもかかわらず、女性も強かったのです。男性に抑圧されるままではなかったのです。「不思議だ」と思いながらも、「よかった」とも思います。そのような感じですが、『ヴィンランド・サガ』は、お父さんと子どもしか登場人物が出てこなくなり、男ばかりになってしまいました。

質問者 F…小澤さん、北欧中世史はジェンダーについてはあまり論じられないのですか。

司会者…もちろんそんなことはありません。むしろ研究分野としては盛んになってきています。女性の財産の件については幸村さんの仰る通りですし、キリスト教化が十分ではない暴力社会のなかで生きる女性のありかたは、他のヨーロッパとは大きく違っていたことは強調されるべきです。一点歴史家としてジェンダー・アプローチが困難である点をあげるとすれば、史料が非常に限られる点です。幸村さんも利用しているであろう「サガ」とよばれる古いアイスランド語で書かれた、ヴァイキング時代の社会を描いたとされる内容豊かなテキストはたくさん残っています。しかし「サガ」はヴァイキングが実際に活動した時代から

数百年後、北欧がすでにキリスト教社会となった後に書き記されたものであり、本来に一〇〇〇年前の状況を反映しているかどうかは留保が必要です。

質問者 F…漫画を拜見して驚いたのは、——小澤さんから聞いている話に強く影響を受けているのかもしれないですけども——『ヴィンランド・サガ』は歴史学者が出している強いメッセージを非常によく吸収しておられるというか、ヴァイキングを題材にしてもいろいろな描き方があると思うのですが、幸村先生が面白いところをぐつつかんでおられるところです。歴史学者はフアクトをただ示しているだけでは多分ないと思うのです。無数にあるフアクトの中で何が面白いフアクトかというのをあれこれ探しているのだと思うのですけれども、幸村先生はそれをさらに漫画を描くときに選んでおられる。やり取りを拜見していると、そういう印象を持ちます。

幸村…恐縮です。たびたび申し上げていますが、漫画家は面白い面白くないに固執する職業です。面白センサーだけで資料を読んでおり、そう考えると、失礼なところもあるでしょうし、「もつときちんと読み込め」と言われるかもしれないかもしれません。でも読めば読むほど、「北欧史はどこを取っても面白いな」と思います。面白くできると言えますか。描きたくて描けなかったいろいろなエピソードがあります。

が、それらも全部宝箱のようです。北欧史だったら、ぺらっと開いて読んだ文献資料は大抵面白い漫画にできると思っています。

質問者G…幸村先生、本当に面白い話をありがとうございます。幸村先生はかなりいろいろなことを勉強なさっていますが、自分も研究者として、幸村先生がどういう研究をしているのか、どういう本を読んでいるかが気になるところです。たくさん質問したいところがある中で、学生の皆さんが一番面白そうなところを伺いたいので、武器の話にさせていただきます。一三巻（第八八話）五六頁に「ウルフベル（フ）トの剣」が出てきます。しかも何の説明もなく、見れば分かるだろうという形で出てきています。これはよほどヴァイキングの世界に通じた武器オタクや剣オタクでないとなかなか突っ込めないところだろうと思います。これをあえて出してきたのは面白いからだろうとは思いますが、他にも意図があったのであればお聞かせ願えればとても勉強になります。

幸村…武器についてですか。

質問者G…作中の持ち主は鉄拳ケティルですね。お金持ちであり、伝説の強い戦士の名をかたっているが、実際は戦士ではなかったという設定の農場主です。ケティルが、自分の宝箱の中から出してくるのは、中世前期において最

高の切れ味を持つといわれるドイツの名剣「ウルフベルトの剣」です。「ウルフベルフト」と（ヴァイキングが使っていた）ルーン文字ではなく、（当時のドイツなどで使われていた）ローマン文字で刻まれています。これはすごいなと思いました。

幸村…ありがとうございます。

質問者G…この工夫というか意図は何ですか。

幸村…知ったかぶってしまおうかなということですよ（笑）。一番下の大きいコマですね。剣の片側の面に人の顔が映っています。剣の刃と刃の間にへこんだ部分があって、そこを樋とといいます。そこに当時の字で「ウルフベルフト」という文字が書かれています。ドイツのライン流域にあったとされる、剣の刃を作る有名な工房の銘です。この銘は「ウルフベルフトが作った」という印で、名剣の証です。他の剣よりずっと高値で取引されていたようですので、これが入っているとお金持ちしか買えないのではないかと思っていました。剣に銘を入れたのは、ケティルが半端な金持ちではないという表現でした。

その上で、ケティルがなぜこの剣を購入したのかという点ですね。二つ考えられます。一つは、ケティルは金持ちだがけんかは弱い男ですので、剣について不勉強でなまくらを買わされている可能性があります。もう一つは「俺ぐらいの

名手だったら、よい剣を持つべきだ」と思って遠くから高い剣を取り寄せたことも考えられます。いずれにせよ金持ちというステータスの証です。というものを何の説明もなく描いてしまっただけと読者には理解されないのでしようが、だからといって解説を書くのも野暮でしょう。「これは名剣なのですよ」と下にテロップが出るのも変だと思ったので、しれっと銘文を書かせていただきました。商売根性で申し上げますと、研究者さんもびっくりするほど僕はよく勉強しており、そのようなすごい漫画がたったの税別五九〇円です（笑）。

描いたら面白そうなものは、気付いた限り書き込んでいきます。「ウルフェルフトの剣」のように何の説明もないこともあります。間違っていることもたくさんあるでしょう。もし北欧史やヴァイキング史に興味があればしたら、「幸村、この描写が間違っているぞ」とSNSを通じてお叱りをください。先生が見つつけてくださった「ウルフェルフトの剣」は、たまたま少しよくできた仕事のほうです。駄目なものは本当に駄目ですが。

司会：こういうささやかなところにみえる専門的な知識が、漫画にリアリティを与えています。専門家が見れば「ウルフェルフトの剣」がブランド物であることは分かりますけれども、一般の人はなかなか気付きません。幸村さんはそ

ういったところにさりげなくこだわって、自分の漫画にリアリティを持たせています。

質問等まだまだ続くのだろうと思いますが、時間になりましたので今日の講演はここまでにいたします。最後にもう一度幸村さんに拍手をいただければと思います【写真7】。



（漫画家）

（校正…中丸禎子）

協力…大谷哲

写真7